

岩手県における中学校サッカー指導者の指導の実態

鎌田 安久*・栗林 徹*・田嶋 幸三**

(1993年1月21日受理)

I 序論

日本サッカーの底辺は、近年の小学生サッカー人口の増加にともない、その拡大が著しく、この年齢層の競技人口は、マスメディアや(財)日本サッカー協会等の活動、そのみならず、サッカーそれ自体が持つ魅力と簡易性により、さらに増加することが予想されている¹⁾¹⁸⁾。しかし、その実力は、競技人口増加ほど上がっておらず、ドイツ等の欧州やブラジル等の南米諸国のサッカー先進国の代表チームと日本の代表チームを比較すると、未だにその実力には大きな差がある状況にある¹⁹⁾。逆に、練習日数や練習時間が多いことに起因したスポーツ障害の発生²⁾¹³⁾¹⁵⁾²¹⁾²³⁾や、高度な肉体的、精神的緊張を伴った練習を長期間にわたって課すことによる「バーンアウト・シンドローム」の問題も報告されている¹⁸⁾。これらの問題は、少年期の選手を指導する指導者の指導力や知識の不足、また指導教程の未確立が原因ではないかと考えられ¹⁾⁴⁾²⁰⁾、その問題の具体的把握のために、サッカー少年団に関する実態研究や少年の指導カリキュラムについての研究が行われており、大串ら¹⁴⁾は、サッカー少年団における全国トップレベルのチームは、練習頻度や時間が多いことを指摘し、また、田嶋ら¹⁸⁾は、ドイツの12歳以下のチームと比較して指導対象の人数が多すぎることや技術指導や戦術指導がドリブルに偏りすぎていることを報告している。また、少年を対象とした指導カリキュラムについては、(財)日本サッカー協会技術委員会¹⁷⁾の報告はあるが、成果をあげていない。その原因として指導カリキュラム運用すなわち内容の詳細な提示とその確実な実施が不足していることが指摘され、松本がサッカー指導の教程試案を考え、小学生指導の具体的内容を報告している⁸⁾⁹⁾¹¹⁾。このように、競技人口も増加してきたサッカー少年団に関しては、その問題の具体的把握のための実態研究が行われているが、一貫指導の観点から小学校の次の段階である中学校のサッカーにおける指導の実態についての報告はみあたらない。中学校のサッカーはサッカー少年団とは異なり、義務教育で学校体育の課外活動としての制約を受け、しかも内容がより専門的で、選手は精神的にも不安定な思春期の時期にあることなどから¹⁰⁾その実態を把握することは重要であると考えられる。また選手の実力が向上しないのは、指導に問題があるからだ¹⁶⁾ともいわれていることから、その指導の問題点を明確にし、改善の検討をする事は重要であると考えられる。

そこで本研究では、今回、岩手県内の各地域から選抜された指導者16名と、同じく各地域から選抜された中学1年生220名を対象に、アンケート調査を行い、岩手県中学校サッカーのトップの指導者の指導状況や指導内容、将来有望な中学1年生サッカー選手の各所属チームにお

* 岩手大学教育学部

** 立教大学一般教育部

ける練習状況や意識を把握し、岩手県における中学校サッカーの指導の現状と問題点を明確にすることを目的とした。

II 方法

1. 対象

第1回岩手県中学1年生サッカー大会に参加した、岩手県内14地域(1.盛岡A, 2.盛岡B, 3.遠野 4.紫波 5.花巻 6.和賀 7.釜石 8.西磐井 9.岩手 10.胆江 11.宮古・下北 12.二戸 13.気仙A 14.気仙B)からそれぞれ選抜された指導者16名、選手220名であった。

2. 調査時期および方法・内容

1989年8月11日・12日に実施された第1回岩手県中学1年生サッカー大会の期間中に、大会役員を通じて各地域選抜チームの代表に直接質問紙による調査を依頼し回収した。回収率は、指導者・中学生ともに100%であった。調査内容は、田嶋ら¹⁸⁾の質問紙を参考にした以下の項目であった。A. 指導者を対象とした調査項目：①氏名 ②年齢 ③職業 ④選手歴 ⑤指導経験年数 ⑥サッカー指導者資格(旧資格制度) ⑦1週間の指導回数 ⑧1回の指導時間 ⑨1回に指導する選手数 ⑩一般的指導上の留意点 ⑪指導上の目標 ⑫技術指導の強調点 ⑬突破時における戦術の強調点 ⑭指導に対する報酬 B. 中学生を対象とした調査項目：①氏名 ②年齢 ③サッカー歴 ④サッカーを始めた動機 ⑤1週間の練習回数 ⑥部活動以外でのサッカーの練習状況 ⑦1回の練習時間 ⑧練習の楽しさ ⑨習得したい技術 ⑩突破時における戦術の選択 ⑪サッカーでの目標 ⑫サッカーの観戦

III 結果及び考察

1. 中学校サッカー指導者の経歴

表1・2・3・4・5・6は、各地域選抜チームの指導者の年齢・職種・選手歴・指導歴・指導者資格・指導報酬について示している。指導者の年齢は、26～30歳が5人、31～35歳が6人と参加指導者の約7割を占めていた。指導者の職種については、全員が教師であり、このことは中学校のサッカー部活動が、義務教育の課外活動の一貫であり、学校外の人材の登用が困難であることが考えられた。各指導者の選手歴は、国体選手を経験しているものが3名、大学・高校での部活動経験者が8名、経験無しが3名であり、高いレベルのサッカーを経験することによって、優れたサッカーのイメージを持った指導者が、選抜チームのスタッフに少ないことが伺えた。指導歴は、1年から10年以上と幅があり、4年から7年が5割を占めていた。サッカーの指導資格については、有資格者が3名で、無資格者が10名であり、中学校選抜チームのスタッフでは、有資格者が少ない現状が明らかになった。また、指導に対する報酬については、報酬を得ているものは皆無で、これは対象者がすべて教師であり、課外活動の一貫として指導しているためであると考えられる。

これらのことから、今回、岩手県内各地域から選出された中学選抜チームの指導者は、中学校のサッカー部活動が、義務教育の課外活動の一貫であり、学校外の人材の登用が困難であることからすべて学校教師であり、また、選出された中学選抜チームの指導者ではあるが、高いレベルのサッカー経験者は少なく、サッカー指導の有資格者も少ないことが認められた。

表1 指導者の年齢

年齢	人数	%
25歳以下	0	0
26-30歳	5	31.3
31-35歳	6	37.5
36-40歳	2	12.5
41歳以上	2	12.5
無回答	1	6.2
計	16	100

表2 指導者の職種

年齢	人数	%
教師	16	100
無回答	0	0
計	16	100

表3 指導者のサッカー選手歴

選手歴	人数	%
全日本代表選手	0	0
日本リーグ選手	0	0
国体選手	3	18.75
部活動(大・高)	8	50
サッカー経験無し	3	18.75
無回答	2	12.5
計	16	100

表4 指導者のサッカー指導経験年数

指導歴	人数	%
1年以下	1	6.25
1-3年	1	6.25
3-5年	5	31.25
5-10年	4	25
10年以上	1	6.25
無回答	4	25
計	16	100

表5 指導者のサッカー指導資格の取得状況

資格	人数	%
上級コーチ	0	0
公認コーチ	0	0
リーダー	3	18.75
取得予定	2	12.5
取得意志無し	8	50
無回答	3	18.75
計	16	100

表6 指導者の指導に対する報酬

指導の報酬	人数	%
得ている	0	0
全く得ていない	16	100
実費だけ得ている	0	0
無回答	0	0
計	16	100

2. 中学生の選手歴

表7・8は、中学選抜選手のサッカー歴・サッカー開始動機について示している。中学1年生の選抜選手のサッカー歴は、1年以上が8割以上で、小学生サッカー選手の競技人口の増加を裏付ける結果であった。しかし、一方で、選抜選手の中に、サッカー歴が0.5年未満で中学入学後サッカーを始めたと考えられる者が16%おり、時間をかけてボール扱いがスキルフルになることが望ましい少年時代¹⁾の選手に、中学校から始めたばかりの選手が3カ月程度で選抜選手として選出されていることは、各地域における小学生サッカーの普及レベルの格差や体力・体格重視の選考基準に問題があるのではないかと推測される。また、サッカーを始めた動機は、サッカーが楽しそうだったからと回答した選手が152人と全体の7割を占めていた。

表7 選手のサッカー歴

サッカー歴	人数	%
0.5年未満	35	15.9
0.5-1年	8	3.6
1-2年	14	6.4
2-3年	32	14.5
3-4年	42	19.2
4-5年	39	17.7
5-6年	27	12.3
6年以上	19	8.6
無回答	4	1.8
計	220	100

表8 選手のサッカーを始めた動機

開始動機	人数	%
両親の勧め	3	1.4
先生の勧め	6	2.7
兄弟、友達の影響	46	20.9
サッカーが楽しそう	152	69.1
選手がカッコイイ	7	3.2
その他	2	0.9
無回答	4	1.8
計	220	100

3. 指導者の指導量と選手の練習量、及び指導効率

表9・10及び図1は、各自のチームにおける指導者の1週間の指導頻度と、選手の1週間の練習頻度を示している。指導者の指導頻度については、1週間に6回指導すると回答した者が4人と全体の25%で最も多く、次が1週間に7回指導すると回答した3人の19%、以下毎週5回が2人、毎週4回・3回・2回・1回が各1人で、平均5回/週という結果であった。これに対し、選手の練習の頻度は、1週間に7回、1週間に6回練習すると回答した者がそれぞれ90人と全体の40%ずつで最も多く、以下毎週5回18人・4回10人・3回8人・2回3人・1回1人で、平均6回/週という結果であった。これらのことから、選ばれた指導者の1週間の指導頻度と、選手の1週間の練習頻度は、ともに6~7回が多く、平均では選抜選手の練習頻度が指導頻度よりも多いことが認められた。この結果は、ドイツの13~14歳のサッカー選手の指導教程²⁾や松本¹¹⁾の指導教程試案で提唱されている指導頻度の「毎週3~5回」よりも多い傾向にあることが認められた。

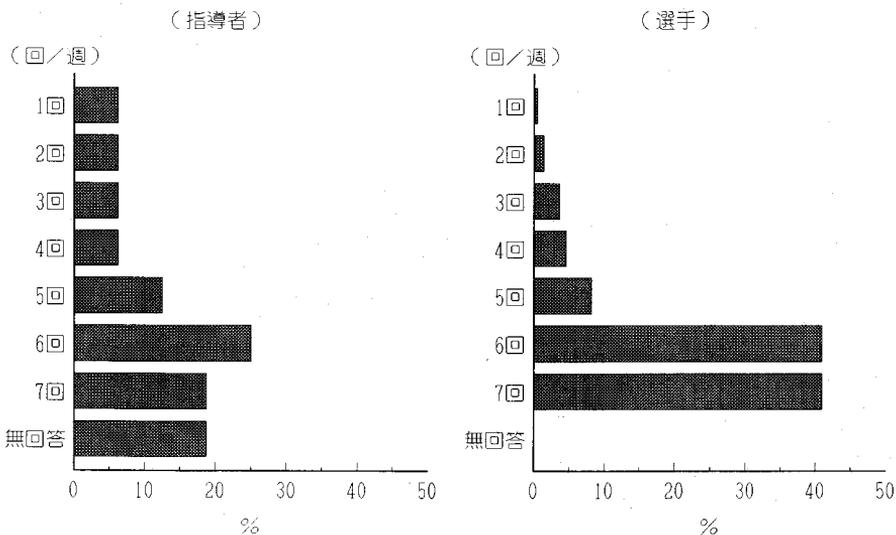


図1 1週間における指導者の指導頻度と選手の練習頻度

表9 指導者の1週間の指導頻度

回/週	人数	%
1回	1	6.25
2回	1	6.25
3回	1	6.25
4回	1	6.25
5回	2	12.5
6回	4	25
7回	3	18.75
無回答	3	18.75
計	16	100

表10 選手の1週間の練習頻度

回/週	人数	%
1回	1	0.5
2回	3	1.4
3回	8	3.6
4回	10	4.5
5回	18	8.2
6回	90	40.9
7回	90	40.9
無回答	0	0
計	220	100

また、表11・12及び図2は、各自のチームにおける指導者の1回の指導時間と、選手の1回の練習時間を示している。指導者の1回の指導時間については、120～150分と回答した者が9人と全体の56%で最も多く、次が1回に150～180分と回答した5人の31%、そして90～120分と回答した2人の13%で、平均141分/回という結果であった。これに対し、選手の1回の練習時間は、120～150分と回答した者が171人と全体の78%で最も多く、以下90～120分20人・60～90分14人・60分未満15人で、平均122分/回という結果であった。このことから、選抜された指導者の1回の指導時間と、選手の1回の練習時間は、ともに120分～150分が多い結果となった。この結果は、ドイツの13～14歳のサッカー選手の指導教程²⁾や松本¹¹⁾の指導教程試案で提唱されている指導時間の「1回につき90～120分間」よりも多い傾向にあることが認められた。

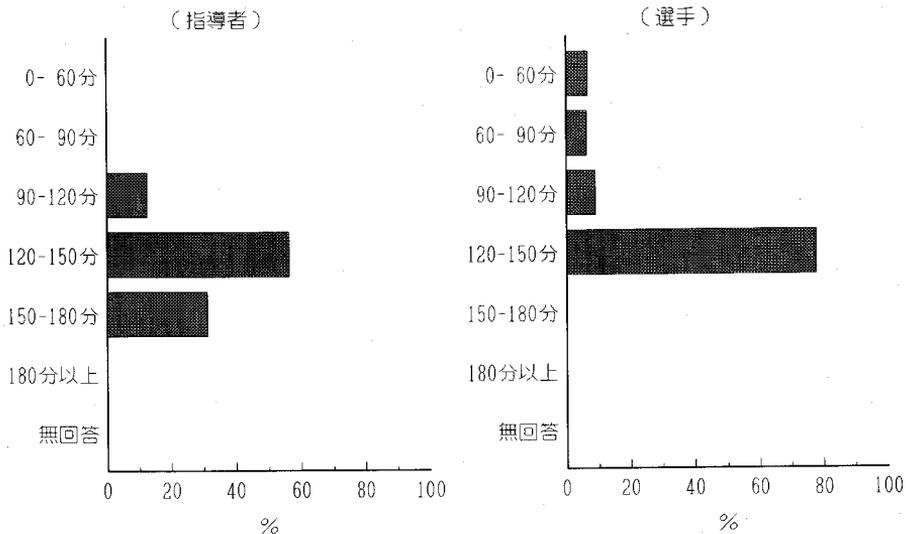


図2 指導者の1回の指導時間と選手の1回の練習時間

